2．ウサクマイN遺跡の性格について　―律令国家と擦文文化・オホーツク文化―

Ⅰ．ウサクマイN遺跡出土の擦文式土器、富壽神寶・須恵器、オホーツク式土器について

搬入品としての富壽神寶・須恵器・オホーツク式土器

富壽神寶は2枚とも当地で鋳造されたものではない。当時の鋳銭司は長門(山口県下関市長府町覚宛寺付近)、田原(大阪府四条畷市と奈良県生駒市に接する付近)、岡田(京都府相楽郡加茂町銭司)などに置かれていた。その地方で鋳造されたものが、めぐりめぐって当地に搬入されたものと思われる。富壽神寶の内側の縁は磨耗していないので、鋳造されてから時間の経たないうちにウサクマイに持ち込まれた可能性が高い。

須恵器についても、当地、そして北海道を見渡してもその窯跡は発見されていないことから、これも搬入品である。小松正夫氏の肉眼観察によると秋田城跡周辺の窯跡のものと推論されている。[註1)]

オホーツク式土器は、胎土・製作技法などから、在地の集団が製作したものではない。ソーメン状の文様は「チューブデコレーション技法」[註2)] によってつくられたものと思われ、道東の中期オホーツク文化[註3)]のオホーツク式土器にその類例が求められる。

搬入品の年代

富壽神寶の年代は、それの初鋳年代が弘仁9年（818年）である。前に述べたように縁辺部がすりへっていないことなどから、鋳造された後にそれほど時間が経たないうちに持ち運ばれたもの、すなわち9世紀前半と推定しうる。オホーツク式土器は、B－Tmの下から出土していること、そして、それがチューブデコレーション技法を用いながらも、ソーメン文様の頂部を指で押圧していることなどから「藤本e群」[註4)] と「トビニタイII式土器」[註5)] の間に位置づけられる。8世紀後半から9世紀前半と位置づけられる。須恵器については、9世紀前半と推定されている。[註6)]

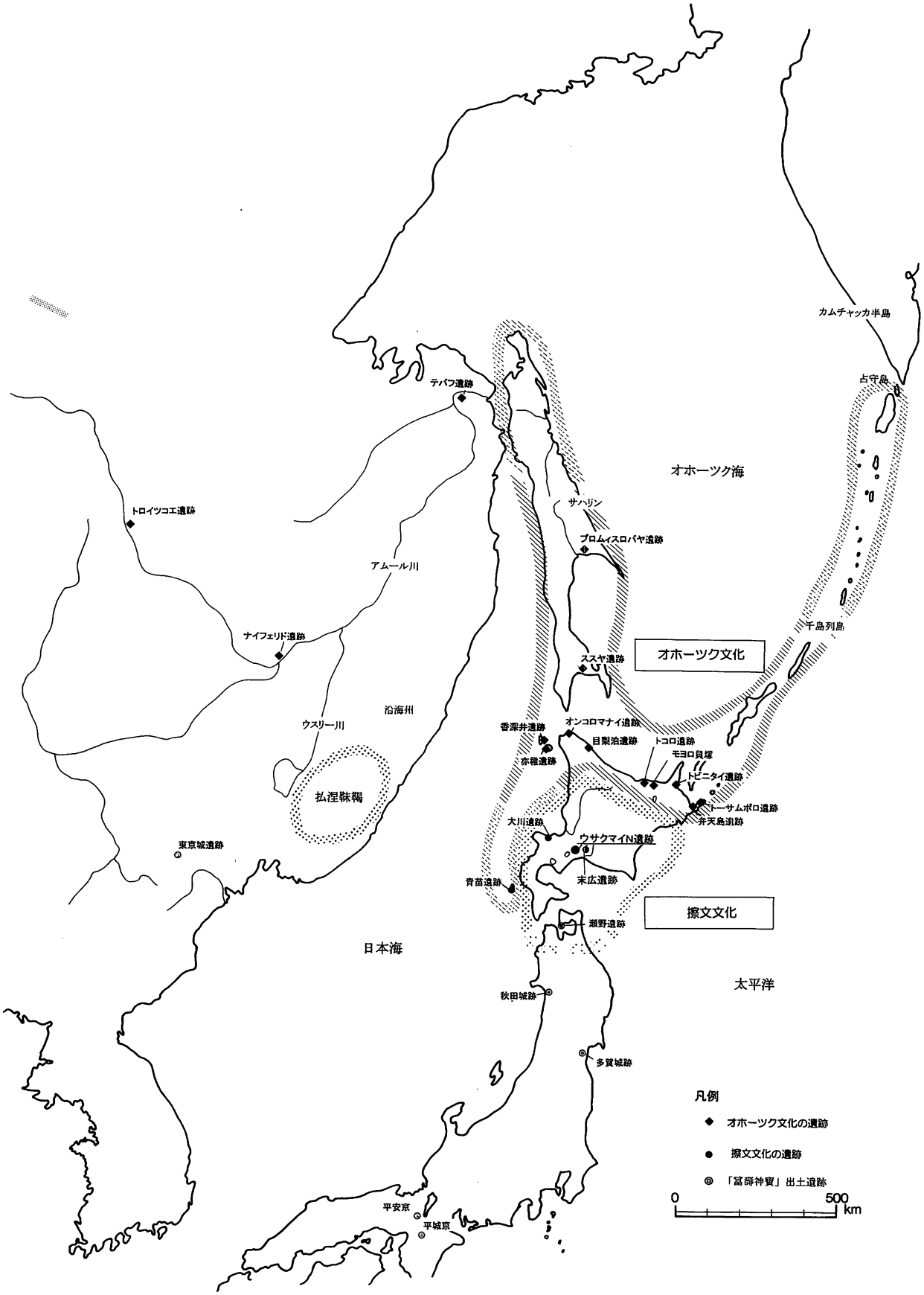
以上のように搬入品は、ほぼ8世紀後半から9世紀前半に集中していることがうかがえる。そして、ウサクマイN遺跡の主体をなす擦文式土器は、擦文文化前期[註7)] の所産で、その年代は8世紀後半から9世紀前半にかけてのものである。

搬入品の原産地

須恵器は、秋田城周辺の窯跡で生産されたものが持ち運ばれた可能性が高い。では、富壽神寶はどうか。これも須恵器とともに当地に運ばれたものと思われる。東北地方で、富壽神寶が出土している遺跡は秋田城・多賀城・多賀城周辺である。これらは、律令国家の出先機関としての機能を持っているところである。したがって、ウサクマイN遺跡の人々が、主要には秋田城まで出向き、朝貢の見返り品として富壽神寶を授かったものと考えたい。他方、オホーツク式土器は、先に道東の中期オホーツク文化の所産であると述べたが、モヨロ貝塚・目梨泊遺跡を残した人々との接触によってもたらされたものと思われる。

このように、ウサクマイN遺跡は、東北地方から持ちこまれた文物と道東地方から持ちこまれた文物がクロスする“地政的な位置”（図Ⅴ－1参照）においても重要な場所であったことがうかがえるのである。

以下においては、ウサクマイN遺跡出土の銛頭と動物遺体を切り口として、擦文文化における初期・前期における毛皮交易、ひいてはオホーツク文化の毛皮交易についてふれる。そして、その問題を考えるうえで前提として擦文・オホーツク文化の生業について簡単に言及する。

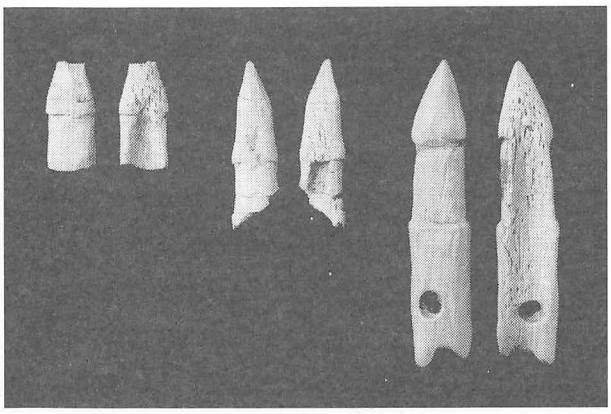


図Ⅴ－1　ウサクマイN遺跡をめぐる諸文化の遺跡分布

Ⅱ．ウサクマイN遺跡(内陸部)で発見された銛頭と海獣骨

高橋理氏は、千歳市教育委員会で平成6年6月に調査したウサクマイN遺跡の報告書[註8]で、内陸部で発見された銛頭が必ずしも海獣狩猟用の狩猟具ではなく、「サケ科魚類を捕獲の対象とする河川との強い関連性がうかがわれる」[註9]と考えた。だが、当センターが、今日調査した擦文文化期の動物遺体には海獣骨が少量ではあるが検出されている。千歳地方においては美々4遺跡(縄文後期中葉)[註10]、ウサクマイN遺跡(擦文文化期)、美々8遺跡(アイヌ文化期)[註11]において、いずれも茎溝式銛頭と呼ばれる銛頭が内陸部で出土している。美々4遺跡では動物遺体としてアシカが検出されることから推察すると茎溝式銛頭はアシカ猟の狩猟具の先端部と考えられる。そして、ウサクマイN遺跡においても同様に、その海獣骨はアシカと推測される。もちろん、内陸部の海獣狩猟が海岸部の集団が行っていた海獣狩猟と同じ性質のものではないであろう。また、擦文文化期のメカジキの遺体も出土している。内陸部における海獣狩猟、メカジキ漁は、威信行為としてアイヌ文化にまで受け継がれていったものと思われる[註12]。

ところで、メカジキ遺体は、当遺跡の人々が太平洋沿岸にまで出向いて捕獲したものと思われる。そして、このメカジキ漁にも茎溝式銛頭が使用された可能性が高い。今のところ、当遺跡の茎溝式銛頭には、2つのタイプに分類しうる特徴的な要素は見当たらない。近世になると内陸部の美々8遺跡でメカジキの絵が刻まれた早櫂が出土している[註13]。銛頭は出土しないがメカジキ漁を行っていた間接的な証拠となる。その他に板綴船の舷側板、車櫂、タカマジなどが出土していることなどから推し測るならば、美々8遺跡は内陸部の船着場跡と考えられる。ウサクマイN遺跡の人々は、ウサクマイから丸木船に乗って美々まで行き、美々から舷側板を組み立て板綴船を造り、太平洋沿岸に乗り出し、他方、千歳川から日本海沿岸に出向き、海獣狩猟、メカジキ漁、そして毛皮交易を行っていた可能性が高いと思われる。



1．ウサクマイN遺跡（道埋文センター調査）　実大
2．ウサクマイN遺跡（千歳市教育委員会調査）
3．美々4遺跡（呑口）（北海道教育委員会調査）

Ⅲ．擦文文化における生業

若干の研究史

1972年に、吉崎昌一氏は「擦文文化は農耕文化である。ただし米と金属器の自家生産がない点で土師(古墳文化)と区別されるというわけです」[註14]という考えを提示した。その後、吉崎氏はこの考えにもとづき擦文農耕論を積極的に展開してきている。これに対して、藤本強氏は、擦文サケ・マス論を主張している。すなわち、「副次的には原初的農耕、堅果・根菜類の採集、陸獣の狩猟なども行われていたであろう。また、全道的にまったく同一形態で生業が行われていたとも思われない。それぞれの地域や集落の環境条件によって、比重にかかる生業はある程度異なっていたものと考えられる。だが、その中心はサケ・マスの漁撈にあったことは疑いえない。」[註15]と主張した。

このような擦文農耕論と擦文サケ・マス論の対立が続くなかで、斎藤傑氏が1987年に擦文文化において鉄製品を受け入れることの意義についてふれた。「自分たちが造った道具で自分たちが必要なだけの獲物があれば生活が成り立っていた社会が、鉄を受け入れるために、より以上の獲物が必要になってくる」[註16]と述べた。つまり、そこでは農耕よりも鉄製品のほうが重要であると主張していた。しかし問題は、

吉崎氏が指摘した「米と金属器の自家生産がない点」が土師器文化とどこがどう異なるのかということに鍵が隠されているようと思われる。例えば、元慶二年（878年）の“元慶の乱”前後の出羽国と渡島蝦夷の関係は7世紀から9世紀にかけての擦文文化と律令国家の関係を反映している可能性が考えられる。

中村英重氏の見解によるならば、「津軽・渡島蝦夷は出羽国司による圧政・収奪からは比較的自由な立場にあり、この叛乱に加勢する事はしなかった。むしろ逆に出羽国側に加担し、同じ蝦夷同志でありながら、叛乱蝦夷の討伐を申請している。…これを考えた場合、やはり交易の問題を想起せざるを得ない。」[註17] ととらえ、そして「このような事は、渡島および津軽蝦夷にとり、出羽国や『王臣諸家』との交易が両者の存立基盤になっているだけに、交易の延引は深刻な問題となっていたであろう。」[註18] という考えを示している。実際、延暦二十一年（802年）六月二十四日官符によるならば、渡島蝦夷の朝貢物は雑皮（クマ皮・アシカ皮・オットセイ皮など）が主で来日の日には「王臣諸家」競って好皮を求めていた。このような関係を通じて、出羽国は、渡島蝦夷に食料などを饗給していた。このようなことから中村氏は「渡島蝦夷の社会（擦文社会…筆者）が交易などを通じて出羽国を中心とした本州のほうに、食糧の供給をあおぐ社会構造に変質しており、自立的な生産基盤を失っている事がよくわかる」[註19] と結論づけている。では、考古学的な見地から、はたしてそのようにいえるのかどうか。毛皮に着目しつつ、上記の問題を考えるきっかけを考えていきたい。

内陸部と海岸部の生業について

これまで、擦文文化は海岸部の生業と統一されたかたちで論じられることはなかった。したがって、ここでは初期擦文文化の生業のプロトタイプが形成されたと考えられる続縄文時代後半（後北C_2式期）の札幌市K－135遺跡[註20]（内陸部）と余市町フゴッペ洞窟遺跡[註21]（海岸部）を取り上げ、その両者の関係についてふれておくことにする。K－135遺跡の第一文化層のⅦc層から「古い後北C_2式土器」とともに、東北地方の弥生文化の文物が大量に、しかもセットで発見された。この事実から上野秀一氏は「これらの文物とともに農耕技術、そしてイネ科を中心とした栽培種の種子とそれらに関係した雑草の種子も運ばれてきた」[註22] と推論している。動物遺体は、焚火跡(焼土)から、動物骨全体の約80%を占めるサケ属が出土、その他は、シカ科を中心に、鳥綱、ネズミ科、イタチ科、クマ科の獣類である。石器の組み合せは、石鏃・石錐・ナイフ状石器・円形掻器、使用痕のある剥片など石器群全体のバランスは比較的安定しており、そのなかで円形掻器は全体の約14%である。だが、第Ⅱ文化層(Ⅲa、Ⅲb層)段階になると動物遺体と石器に次のような変化が見られてくる。

まず、サケ属が極端に減少し、逆に獣類の比率が多くなる。次に、石器群の組み合せは、偏りが認められ、小型の円形掻器が石器群全体の約43%を占めるようになる。

上野氏は、以上の結果から「第Ⅰ文化層段階では、専業的なサケ漁が認められ、その立地がサケ類が遡上する河川沿いに移るという事実は、この段階から擦文文化ないしアイヌ文化に近い生活と立地が始まったということができる。…また、後述するように擦文文化では農耕がかなり一般化していたと考えられるが、K－135遺跡4丁目地点で見られるようにその前段階の時期にすでにその萌芽があったといえる。」[註23] ととらえた。他方、第Ⅱ文化層については、「サケ類の検出量が減り、獣類が増加する事実は、この時期においてサケ漁にあまり依存しない生活パターンがあったことを示すもので、しかも本遺跡のように河川周辺の微高地に立地している理由としては、この段階では、陸獣猟と同時に農耕のウエイトが増してきたことも考えられる。」[註24] とした。上野氏の主張は農耕にウエイトがおかれ、鉄製品の流入との関係において陸獣猟そして海獣猟を表立って問題にしているわけではないが重要な提起を行ったといえる。

他方、フッゴペ洞窟遺跡においては、後北C_2・D式土器とともに多量の骨角器—特に銛頭—が発見されている。この遺跡の特徴は、銛頭の組み合せが続縄文文化前半の銛頭のあり方と大きく異なることである。

後者においては東北地方の燕形銛頭、そして「恵山型離頭銛頭」[註25] などの茎槽式銛頭が圧倒的に多く、茎溝式銛頭は少ない。これに対して、前者においては茎槽式銛頭が1点のみで、残りは茎溝式銛頭である。茎溝式銛頭は、大塚がいう「抉入離頭銛」[註26] 頭で、海獣（トド・オットセイ・アシカアザラシ）を捕獲する道具といわれている。他方、ここでいう茎槽式銛頭は、東北地方の燕形銛頭に相当するもので、マグロ漁用[註27] の道具と推定される。このことから類推するならば、続縄文文化前半において道南太平洋沿岸から積丹半島のは日本海沿岸にかけて、隆盛していたマグロ漁が後北C_2・D式期になると衰退し、海獣狩猟が活性化した可能性が考えられる。実際に後北C_2・D式期以降、擦文文化にかけての銛頭は茎溝式銛頭一色になるのはその事実を反映している可能性が大きい。

以上のように内陸部と海岸部の遺跡を統一的にとらえてみるならば、内陸部では、農耕・陸獣狩猟（クマ・シカなど）そして河川漁労（サケ・マスなど）、海岸部では、沿岸漁労・海獣狩猟（アシカ・オットセイ）などの生業が行われていたと思われる。農耕とサケ・マス漁が第一次生業とするならば、毛皮を生産することは第二次生業ということができる。この第二次生業が隆盛する背景には第一次生業が一定程度安定していくことと無関係ではないと思われる。文献に依拠する研究者は、毛皮の流通過程を主要に取り上げ、それを毛皮の生産過程と統一してとらえることをなおざりにしているといって過言ではない。もちろん、考古学を研究するものも土器に偏りすぎて毛皮のように遺物として残りにくいものにはしりごみをするのが一般的であるが…。その意味でも動物遺体と漁・狩猟具との関係を考えていくことが大切である。

鉄製品・米と交換される生産物は何か

瀬川拓郎氏は、鉄製品との交換しうる品物を干鮭と考えているようである。[註28] しかし、初期・中期の擦文文化においては、はたしてそのように言えるのであろうか。

まず大切なことは、鉄製品と交換する生産物がいかなるものなのかということである。その場合に、鉄製品所有者と鉄製品を欲する側との関係をおくことから考えなければならない。つまり、鉄製品所有者にとって有用性をもっている生産物が交換性をもつということである。能動的な役割を果たすのが鉄製品所有者である。鉄製品所有者が、律令国家の成員であるとするならば、彼らにとって何がもっとも有用性のある生産物となるのであろうか。それは律令国家において身分標識となっていた毛皮の可能性が大きく浮かび上がってくるのである。もちろん、鉄製品と毛皮の交換は、朝貢という形式をとりながら行われていたのである。つまり、当初は素性のしらぬものがいっても交換が可能というわけではなく、擦文社会における“一定の層”が交換の主要な担い手となることを意味する。次に大切なことは、鉄製品の受容は、擦文社会のなかに、鉄製品を早目に取り入れた地域＝先進地域と遅れて取り入れた地域＝後発地域、そして中間地帯というように擦文社会の中に“格差”が生み出されたことが考えられる。特に、道東地域の初期段階における鉄製品の受容は遅れていたこととも関係して続縄文的な生業形態を色濃く残していたと思われる。他方、石狩低地帯の初期擦文文化においては鉄製品の受容と農耕を発達させ、「北海道式古墳」、を生みだすまでに力を蓄えていったものと推測される。

いずれにしても、北海道においては、鉄製品の自家生産、そして稲をつくりえなかったこと、この鉄製品と稲の交換のために、毛皮―主に海獣の毛皮―を生産しえたことが逆に北海道の歴史に暗い影を落とし始めたと筆者は考えるのである。北海道の歴史を語る場合、ある意味で、土器とともに海獣狩猟用の道具（銛頭）を問題にしないと始まらない理由はそこにあると思われる。[註29]

Ⅳ. オホーツク文化における生業

オホーツク文化におけるクジラ漁

ところで、サハリンから道北・道東・南千島のオホーツク海沿岸に分布するオホーツク文化は、当初海獣狩猟文化と言われていたが、礼文町香深井A遺跡の発掘調査以降[註30]、大井晴男氏、西本豊弘氏によって、オホーツク文化は、カロリー計算にもとづいて主要な生業は漁撈であると強調されてきたのであった。しかし、大井・西本説においては、続縄文文化（＝ススヤ文化）[註31]においても漁撈は発達していたことから考えると何を持ってススヤ文化とオホーツク文化を区別するのかということが疑問として残る。

筆者は、この問題にふれたことがある。[註32] 海の“大型魚”、クジラを捕獲することによって初めて、マリタイムアダプテーションを完成させたのがオホーツク文化であると提起した。続縄文段階では沿岸漁撈、海・陸獣狩猟、植物採集という生業の組み合わせであったのが、オホーツク文化の初期（十和田式期）になると海獣狩猟からクジラ漁が分化し、沿岸補鯨、沿岸漁撈、海・陸獣狩猟そして植物採集という組み合わせをとるようになると考えた。そのように考える根拠となったのは、香深井A遺跡出土の動物遺体である。その鯨類遺物を担当した粕谷俊雄氏は、「本遺跡より出土した鯨骨片はきわめて多数にのぼるが、大部分は細かく割られており、種の査定にたえるものは少ない。細割の程度は特に大型鯨にいちじるしい。これは、下顎骨・顎間骨・上顎骨の一部等の緻密な部分は骨器材料（銛頭と骨鏃…筆者）に供し、その他の海綿状の骨格からは脂肪を抽出したことを示すものと思われる。」[註33] と述べ、「香深井A遺跡では、ゴンドウクジラ属とオキゴンドウの骨は多数の層から出土しているので、積極的に捕獲がおこなわれたと推進できる。また本遺跡出土の鳥骨製の針入に描かれたゴンドウクジラの図は、種の特徴をきわめて巧みに表現している。このことは当時の住民が本種をよく知っていた。すなわち日常漁獲していたことを示す。」[註34] として礼文島におけるクジラ漁が積極的に行われていたことを強調した。もちろん、ここでは体長5m前後のゴンドウについてふれ、体長15m前後のセミクジラ・ザトウクジラ・イワシクジラ・マッコウクジラなどの大型クジラについてふれていないが、それをも想定していることは間違いない。なぜならば、鈴谷貝塚、モヨロ貝塚、弁天貝塚出土の針入れに描かれた捕鯨図のクジラ[註35] は、大型鯨であるのは確かである。また、初期オホーツク文化において典型的な銛頭＝茎槽式銛頭（前田のいうオホーツクD群）が出現する。この銛頭は、擦文文化の銛頭にはないものでオホーツク文化に固有の銛頭である。筆者はこれを捕鯨用の銛頭と推定している。さらにまた香深井A遺跡魚骨層IIの下底近くに発見された大規模な石積み遺構の性格についてである。それは、円形に配列された8頭分のゴンドウクジラおよびイルカの頭骨を中核にして形成されたもので、“クジラ祭り”が行われた祭祀跡と考えるべき性格の遺構である。このクジラ祭りは、大井晴男氏のいうように「当時の香深井集落をあげての共同労働の結果であり」[註36] かつ、「香深井集落の構成員の、あるいは礼文島における地域集団の、連帯を確認する共同の祭祀としての意義をになっていた可能性がある」[註37] といえる。このオホーツク文化におけるクジラ祭りを大井氏は、「彼等において、経済的な意味においてではなく、むしろ信仰的・社会的に重要な意味をもっていたのではないか」[註38] ととらえたが、筆者は、この“クジラ祭り”は、テトラポッチ（＝富の再配分）としての意義をもっていたものと推論している。

オホーツク文化は環日本海沿岸に発達したクジラ漁の“洗礼”を受け、ススヤ文化の段階で培われていた海獣・陸獣狩猟、沿岸漁撈の技術をベースにクジラ漁を積極的に取り入れることによって海のあらゆる獲物を捕獲すること（＝マリタイムアダプテーションの完成形態）が可能になったと思われる。

7世紀から9世紀にかけて環日本海的に展開された捕鯨についてふれるならば次のようなことがいえる。

第一に『日本書紀』（巻第二十）敏達天皇二年（573年）に「八月甲午の朔丁未に、送使難破、還り来て復命して日さく『海の裏に鯨魚大きなる有りて、船と檝と櫂と遮へ齧ふ。難破等、魚の船呑まむことを

恐りて、入海ること得ず』とまうす。」[註39] という挿話がある。「石川・福井県あたりの海岸」に当時、鯨が回遊していたことを示すものと思われる。そして、鯨は鯨魚（くぢら）、魚（いを）と呼称されていた。

第二に『日本書紀』（巻第十九）欽明天皇五年（551年）十二月「十二がつに越国言さく、「佐渡嶋の北の御名部の碕岸に粛慎人有りて、一船船に乗りて淹留る。春夏捕漁して食に充つ。」[註40] という条がある。敏達期の挿話から推論するとこの「春夏捕漁して」の捕魚（すなどり）というのは捕鯨のことを指しているように思われる。つまり、粛慎（＝払涅靺鞨を指している？）が捕鯨を行うために季節的に佐渡に停留していたと考えられるわけである。

第三に、長崎県壱岐郡郷ノ浦町の鬼屋窪古墳の壁に描かれていた捕鯨図である。この古墳からは7世紀後半の須恵器が出土している。この壁画には鯨に銛が打ち込まれ、銛頭につなげられた綱が表現されている。船は帆船で、オホーツク文化の船とは異なることに留意する必要がある。銛頭は貝島古墳群出土の鉄製銛頭に類似したものと思われる。

第四に『新唐書』黒水靺鞨伝によると「払涅はまた大払涅とも称し、開元（713～741）・天宝（742～756）年間に八回来て、鯨晴（鯨の眼球の水晶体）、貂鼠皮や白兎の皮を献じた。」[註41] とある。払涅靺鞨の居住地は明確ではないが、唐に鯨晴を献上していることからするならば、沿海州沿岸地方で鯨漁を生業としていたことがうかがえる。このことからすると、欽明期の粛慎を払涅靺鞨と結びつけることが必ずしも荒唐無稽とはいえないであろう。

このように7世紀、8世紀に越前、西九州、沿海州の日本海沿岸において、クジラ漁が行われたことを推論してきた。実際、秋田城、ウサクマイN遺跡でクジラの骨が出土している。クジラの骨は肋骨が多いことから、骨角器の厚材の可能性が高い。しかし、クジラの肉が当時一定の階層の人々の食卓にのぼっていた可能性も否定できない。例えば、『古事記』に鴨をとる罠に海の大物クジラがかかったという久米歌の箇所[註42] がある。そして、「古妻がお薬を欲しかったら、肉の少ないところをへぎ取ってやるがよい。後で娶った妻がお薬を欲しかったら、肉の多いところをへぎとってやるがよい。」[註43] と歌われている。久米氏はもともと西南地方の隼人系の出身といわれ、彼らは「海人系の海の民」[註44] といわれている。

オホーツク文化における海獣狩猟

オホーツク文化における海獣狩猟、陸獣狩猟を軽視してはならない。海獣狩猟については、トド・アシカ・オットセイ・アザラシの捕獲が重要になる。この捕獲の道具は、北海道の縄文文化伝来の茎溝式銛頭が使われていた可能性が高い。そして陸獣狩猟についていえば、テン猟が重要となる。つまり、テン皮が律令国家に727年以降渤海によってもたらされてくるのだが、その点については後述する。

『新唐書』巻220流鬼伝に「貞観14年（640年）にその王は子の可也余（志）を遣わし、貂皮を（貢ぎ）、三訳を更えて来朝した」[註45] と記述されている。この流鬼をどの民族にあてるかの論争があるがここではふれない。7世紀中頃にカムチャトカ半島からオホーツク海沿岸にかけて住んでいた人々がテン皮を唐に朝貢していたことがその記述からうかがい知ることができる。例えば、直良信夫氏は、トコロ・ウトロ・トビニタイ各遺跡発掘の自然遺物について「鹿の頭骨には殆どなかったが、エゾタヌキ、キタキツネ、クロテン、カワウソなどの頭蓋骨には左右両側のいずれかの一方に必ずといってよいくらいに、穿孔した部分が存する」[註46] といっている。このことは、直良氏が考えているように「宗教儀礼の一つのあらわれ」ととらえるだけでなく“北方民族”が使用する仕掛け弓によって頭蓋骨が射抜かれたことも想定されるのである。なお、佐々木史郎氏によれば、「毛皮動物の場合は、毛皮を痛めないように矢が頭に命中するように仕掛ける。クロテンの場合は獣道の上に仕掛けて、垂直に落とすようにいることが多い。」[註47] といわれている。

中期オホーツク文化になると、次のようなことからクジラ漁が衰退していくことがうかがえる。立地条件の変化（海岸砂丘から海岸段丘上に遺跡が形成）、銛頭の組み合わせにおいて茎槽式銛頭が減少し茎溝

式銛頭に収れんされていく傾向が認められる。このことは、オホーツク文化において海獣狩猟・農耕に産業のウエイトを置いていくことと無関係ではない。中期の段階になるとオホーツク文化の銛頭は茎溝式銛頭に収れんされていくが、そのあり方は、擦文文化の銛頭と同じ内容をもつようになる。その意味では、8世紀前半以降になるとオホーツク文化も擦文文化も海獣狩猟を積極的に行っていたことがうかがえるのである。このことは、律令国家とのテン皮交易がきっかけをなしていると筆者は推論している。それから、オホーツク海沿岸の中期オホーツク文化の遺跡に茎槽式銛頭にとってかわって小形の逆刺式銛頭が出現してくる。この銛頭は、民族例などを参考にするならば、ラッコ猟の銛弓の可能性が考えられる。常呂町常呂川河口遺跡15号竪穴床面からクマの犬歯を素材としたラッコの彫刻品が出土していること[註48]は、ラッコ猟を行っていたひとつの証拠と思われる。このラッコ猟によって得られた海虎皮がテン皮とともに出羽国あるいは黒水靺鞨に送られた可能性が考えられるのである。

目梨泊遺跡出土の金属器、オホーツク文化における金属製品

ところで、中期オホーツク文化になると道北・道東のオホーツク文化は明らかに擦文文化の集団との交流が色濃く現れてくる。そのひとつの例として枝幸町の目梨泊遺跡[註49]があげられる。目梨泊遺跡においては、刀子、鉄鉾、蕨手刀、直刀、青銅製帯金具などの金属製品が相当数出土している。オホーツク文化の初期段階では金属品の出土例は刀子を除くならば擦文文化のそれに比して多くない。もちろん、十和田式期の墓それ自体がほとんど発見されていないので明確なことはいえないが、住居跡床面出土の遺物の組み合わせから推し計るとその傾向はうかがえる。さらに擦文文化の鉄製品と石器のあり方とオホーツク文化のそれを対比するならば、後者は、特有のあり方を示す。すなわち、副葬品において中期になっても石鏃が副葬されることである。そして、鉄製品が導入されても石器の組み合わせに大きな変化が現れていない。この点については今後の課題として残されている。

ところで、オホーツク文化の中期になるとなぜ、鉄製品、特に蕨手刀が出現してくるのだろうか。そして、その供給先はどこに求められるのだろうか。このような問題は、ウサクマイN遺跡においてなぜ富壽神寶、オホーツク式土器が出土するのか、そして律令国家における“毛皮交易”がどういう実態にあったのかということにつきあたる。

V. 律令国家と擦文文化・オホーツク文化との毛皮交易

文献にあらわれたる毛皮

文献史学の研究者の側から律令国家における毛皮交易についてふれる論稿があるので、それを紹介しつつ、ウサクマイN遺跡の性格についてふれていくことにする。

関口は、「渡島蝦夷と毛皮交易」（佐伯有清編『日本古代中世史論考』1987年）において、次のようなことを述べている。

一つ目は、「『来朝』は、一義的には朝廷に来る事であるが、実際には、朝廷そのものでなくても、地方で朝廷を具現化している施設、例えば国衛などやってくることも『来朝』とよんでいたのではないか」と推論していること。

二つ目は、「渡島蝦夷は8世紀の初めから出羽国衛に来朝し」交易を行い、それが頻繁になることにより、「私交易の問題が生じてきた」らしい。具体的には、百姓との交易により鉄製品と雑皮とを交換し「鉄（此国家之貨）を入手し、農器に鋳直したこと」がうかがわれること。このような背景のもと、毛皮禁止令が打ち出されたとのことである。この歴史的事実を念頭に入れていく必要があること。

三つ目は、出羽国と渡島蝦夷の交易の主要な品目は「『雑皮』、すなわち多種の皮であったが、なかでも確実なものにクマ皮があげられる」と、その他に「葦鹿皮と独犴皮」をあげたことである。前者は、アシカ皮と考えること自体問題はない。しかし後者を関口は、「渡島蝦夷を中継にしてオホーツク文化人からもたらされた犬の毛皮」と考えた。しかしこの考えが、はたして解釈として妥当なのかどうかという疑問が残る。四つ目は、毛皮は、7世紀代には、「多くが敷物として利用されていた」が、「八世紀に入ると次第に毛皮が身分標識として定着しはじめた」事実を明らかにしたことである。

ここでは、第三点目と第四点目について、筆者の意見を述べることにする。

「独犴皮」と東北地方におけるアシカ・オットセイ猟

関口氏は、「独犴皮」を犬とした根拠としては『倭名類聚抄』から「その実体を北方系の犬とみなした」こと、次に『旧唐書』の室韋伝に「家畜として、犬・豕を飼養して食う。その皮をなめし皮とし、男女ともそれで衣服を作る」とあり、そして、この「ブタとイヌの家畜飼養がオホーツク文化にも認められることから『独犴皮』は渡島蝦夷を中継としてオホーツク文化人からもたらされた犬の毛皮とみなすことができよう」と結論づけた。

問題は靺鞨系の人々が、犬・豕の毛皮を衣服として利用していたからといってすぐさまオホーツク文化人も犬・豕の毛皮を衣服としていたかという疑問である。オホーツク文化の遺跡において確かにカラフトブタ、イヌの骨は出土している。そして、ウサクマイN遺跡でもイノシシとイヌが出土している。その意味でもイヌの毛皮がオホーツクからもたらされたと考える説は慎重にならざるをえない。

ところで、『延喜式』（巻二三、民部下）の陸奥・出羽国の交易雑物に関する記述が重要である。葦鹿皮、独犴皮、砂金、昆布、索昆布、細昆布と記載されているのに対して出羽国では、熊皮、葦鹿皮、独犴皮となっている。陸奥国では熊皮がなく、葦鹿皮、独犴皮、砂金、昆布と続くことから考えるとそれら四者は「当土所出」[註50]であることを示している。それでは「当土所出」の独犴皮とはどういう皮をさすのであろうか。

時代は、近世初期であるが、盛岡藩の家老席日記である『雑書』にオットセイの関係記事が出てくる。その記事の中に「沖犬」という記述がある。これを榎森進氏は「南部地方では、オットセイを『沖犬』とも称していたようなので、『沖犬』もオットセイとした」[註51]と述べている。この事実は重要である。なぜなら、東北地方におけるアシカ、オットセイ猟は、縄文時代早期から近世にかけて連綿と続けられた可能性が高いのである。そのひとつの根拠として、渡辺誠氏がいう「一王字型離頭銛頭」[註52]の存在がある。これが東北地方におけるアシカ、オットセイ猟の道具と思われる。もちろん渡辺氏は東北地方における海獣狩猟は縄文時代早期、前期が主流で、平安時代以降になって再び出現してくると考えている。[註53]そして、その平安時代の銛頭は、大塚和義氏と同じように北海道の「抉入離頭銛」が仙台湾まで南下してきたものと把握している。[註54]このような見解の背後には燕形銛頭の存在がある。本州においては、燕形銛頭の系譜、分布などの研究が中心となり、茎溝式銛頭の研究がかなりおろそかにされていたことと無関係ではない。

筆者は東北地方においては縄文早期以来北海道と同じように茎溝式銛頭（＝「一王字型離頭銛頭」）の変遷がたどれると考えている。東北地方においては、縄文後期になり、茎槽式銛頭としての燕形銛頭が出現してくるが、それ以降も茎溝式銛頭が細々とであれ、存在していたと推論している。東北地方における茎溝式銛頭が軽視されていたことと関係して、東北地方における海獣狩猟の問題がエアポケットになっていたことは疑えない。いずれにしても、「独犴皮」は三陸海岸のオットセイ猟によって得られた毛皮をさすものと筆者は考える。

律令国家と渤海との毛皮交易　―敷物としての毛皮から衣服としての毛皮へ―

先に述べたように、7世紀頃の毛皮は主に敷物として利用されていた。『日本書紀』巻第二、神代下第十段に「自づからに、海神の宮に至りたまふ。是の時に、海神、自ら迎へて延き入れて、及ち海驢の皮八重を鋪設きて、其の上に坐ゑたてまつらしむ」とある。この海驢（みち）がアシカの毛皮と注釈されている。この話は、ある程度当時の貴族の生活の一端を取り入れてつくられたものと思われる。『古事記』にも同様のことが書かれている。敷物としては、アシカだけでなく、熊皮・鹿皮などが使用されたことはほぼ間違いないであろう。その敷物としての毛皮から身分標識としての毛皮－特に衣服としての毛皮－転換していくきっかけとなったのが、727年の渤海の出羽国への漂着である。

高仁義を将とする使節団は、727年秋頃、出羽の夷地に漂着したが、その時、高仁義以下十六人は蝦夷に殺される。しかし、残った八人が4ヵ月後に平城京に入った。そのとき、使節団が持ってきた「信物」は、貂皮300張であった。これに対して朝廷は綵絹・綾などの繊維製品を与えた。この貂皮が平安京の貴族生活を席巻することになる。「九一九年（延喜十九年）、第三十四回渤海使裴璆が来日した時、翌年五月十二日の豊楽殿における宴席で大使裴璆は裘衣一領を着て出席したところ、日本の重明親王」[註55]が、黒貂の裘衣八枚を重ね着して参列し、裴璆を驚かせたというエピソードがある。八枚自体、誇張しているが、裴璆が驚くほどの枚数であったことは事実であろう。このエピソードの裏側には次のことが隠されているのではないかと思われる。

まず、第一点目として出羽国の官吏は使節団の信物＝貂皮を実見していると思われること。第二点目としては、10世紀前半になると貂皮が供給過剰といえるほど貴族の中に出回っていたのではないかと推論されることである。筆者はこの2点から次のような考えに至った。

上田雄氏が言うように「渤海使がいかに大量の毛皮をもたらしたといっても、数年に一度の使節が小さな船で運んでくる毛皮の量は、おのずと限りがあり、宮廷貴族社会のすべての需要をまかないきれるものではない。」[註56]といえる。このような限界を克服するものとして、新たに“テンロード”が出羽国によって開拓されたものと思われる。それが、出羽国と擦文文化人を介したオホーツク文化人との交流ではなかったかと推論されるのである。

オホーツク文化期の遺跡では、ほとんどの遺跡でテンの遺体が検出されているのに対して、擦文文化期の遺跡では、テンの遺体が検出される例が極めて少ないのである。ただ、クロテンとエゾクロテンとでは、皮の色が異なりクロテンのほうが珍重される。ただ、オホーツク文化期の遺跡においてクロテンと同定しているものの中にはエゾクロテンもあるのではないかといわれている。その両者の形態上の区別は、今後の問題として残されている。

Ⅵ. 結び

先に述べたが、7世紀中頃にすでに唐に流鬼が黒水靺鞨を介して、貂皮を貢いだことが知られている。727年以降、出羽国が擦文文化人＝ウサクマイN遺跡を残した人々を介して、オホーツク文化人のテン皮を入手したことが推論されるのである。例えば、道東のモヨロ貝塚、目梨泊遺跡から8世紀代の蕨手刀などの鉄製品が多量に出土してくる背景には、擦文文化人とオホーツク人との接解が色濃く反映しているのではないかと思われるのである。そして、また須恵器と富壽神寶が出土してくるのは、出羽国との交流が盛んであったことを物語っているのであろう。その意味で、ウサクマイN遺跡は、毛皮の集荷場としての意義をもっていたものと筆者は推察している。

（種市　幸生）

註 1)　平成12年11月に当埋文センターで小松氏が須恵器を実見した際にコメントを頂いた。

註 2)　畠山三郎太1963年7月「オホーツク文化の造形技法考」『北海道地方史研究』第48号

註 3)　オホーツク文化の時期区分について、筆者は十和田式期を初期、江ノ浦B式、江ノ浦A式期を前期、南貝塚式期を中期、東多来加式期を後期と考えている。

註 4)　藤本強1966年3月「オホーツク土器について」『考古学雑誌』第51巻4号

註 5)　菊池徹夫1972年3月「トビニタイ土器群について」『常呂』東京大学文学部　P453～P454

註 6)　註1）参照

註 7)　擦文文化の時期区分は、大沼忠春氏の考えにもとづく。ただ、前期は細分して考えた。いわゆる十勝茂寄式を初期とし、それ以降を前期とした。

註 8)　高橋理1995年3月「千歳市ウサクマイN遺跡出土の銛先」『ウサクマイN・蘭越7遺跡における考古学的調査』千歳市教育委員会

註 9)　上記報告書

註10)　「美々4遺跡(呑口)」1979年8月『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』北海道教育委員会　P347

註11)　「美々8遺跡」1981年3月『美沢川流域の遺跡群Ⅴ』(財)北海道埋蔵文化財センター　P32

註12)　鈴木信1994年12月「威信経済としてのメカジキ漁」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅣ

註13)　(財)北海道埋蔵文化財センター1994年3月「美々8遺跡低湿部」『美沢川流域の遺跡群XVI』第2分冊

註14)　埴原和郎、藤本英夫、浅井亨、吉崎昌一、河野本道、乳井洋一『シンポジウム　アイヌ―その起原と文化形成―』1972年4月北大図書刊行会　P52

註15)　藤本強1982年8月『擦文文化』教育社　P18～P19

註16)　斉藤傑1987年3月「擦文文化試論―石附喜三男氏への手紙―」『北海道考古学第23号』　P42～P43

註17)　中村英重1989年5月「渡島蝦夷の朝貢と交易」『古代の東北―歴史と民族―』　高科書店　P93～P94

註18)　上記論文

註19)　同上　P95

註20)　『K35遺跡4丁目地点、5丁目地点』1987年1月札幌市文化財調査報告書　札幌市教育委員会

註21)　名取武光編1970年6月『フゴッペ洞窟』ニュー・サイエンス社

註22)　上野秀一1992年8月「本州文化の受容と農耕文化の成立」新版『古代の日本』第九巻　角川書店　P456

註23)　上記論文

註24)　同上

註25)　渡辺誠1973年『縄文時代の漁業』雄山閣

註26)　大塚和義1966年4月「抉入離頭銛」『物質文化』7号

註27)　註25)にあげた報告書参照

註28)　瀬川拓郎1998年「擦文文化とサケ・マス生業論」『考古学ジャーナル』439　P24　瀬川は「9.安倍比羅夫遠征とサケ交易」で「比羅夫の遠征はいずれもサケ遡上期ではなかったが、北海道のサケ資源の豊かさが交易も目的とする比羅夫や越国の豪族らの注意を引くことは当然あり得たと思われる」という見解を述べている。筆者は、驚きを禁じえなかつた。

註29)　筆者は、北海道の歴史はある程度まで、“銛頭史観”で把握することが可能と考えている。その前提的な作業として、雌型銛頭の分類を行った。(「キテをめぐる諸問題(前編)」1998年2月『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念集刊行会を参照のこと)

註30)　大場利夫、大井晴男編1976年3月『香深井遺跡』上巻、同下巻1981年2月　東大出版会、調査は、1968年から1969年、1971年から1972年にかけて行われた。オホーツクの文化におけるトップクラスの遺跡である。

註31)　オホーツク文化の前段階の文化でサハリンの鈴谷遺跡を標式とする。

註32)　「日本海とオホーツク文化」1993年12月北海道日本海古文化懇話会『通信』第2号、現時点では、若干の部分については書き改める必要を感じている。

註33)　粕谷俊雄1981年「香深井A遺跡出土の鯨類遺物」『香深井遺跡』下巻附編3　東京大学出版会

註34)　同上

註35)　八幡一郎1943年8月「骨製針入」『古代文化』名取　武光1948年「絵画に現れたオホーツク式文化の船業」『民族学研究』第13巻1号

註36) 大井晴男1981年2月「II.クジラ祭り」『香深井遺跡』下巻　東京大学出版会　P478

註37) 同上

註38) 同上

註39) 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋　校註1995年2月『日本書紀（四)』岩波文庫　P22、P437

註40) 坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋　校註1994年12月『日本書紀（三)』岩波文庫　P282、P488

註41) 内田吟風、田村実造　訳注者1971年10月『騎馬民族史1』平凡社　P282、P488

註42) 倉野憲司　校註1963年1月『古事記』岩波文庫　P84、P246

註43) 次田真幸　校註1980年12月『古事記（中)』講談社学術文庫　P35～P36

註44) 同上　P43

註45) 菊池俊彦1989年7月「靺鞨と流鬼」『民族接触―北の視点から―』六興出版 P255

註46) 東京大学文学部1964年3月『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻　P181

註47) 佐々木史郎2000年6月「アイヌとその隣人たちの毛皮獣狩猟―ロシア極東先住民族のクロテン用の罠を中心として―『アジア遊学』No. 17 、P51

註48) 武田修1996年3月『常呂川河口遺跡（1)』　常呂町教育委員会　P95、P98

註49) 佐藤隆広1994年3月『目梨泊遺跡』　枝幸町教育委員会

註50) 在地の特産物を指す。

註51) 榎森進1999年4月「近世初期の北奥社会とオットセイ」　渡辺信夫編『東北の交流史』　無明舎出版　P81～P83

註52) 渡辺誠1973年『縄文時代の漁業』雄山閣

註53) 渡辺誠1995年9月「東北地方における一王字型（閣窩式）離頭銛について」『みちのく発掘』　菅原文也先生還暦記念論集刊行会　P310～P313

註54) 註21）文献　P37「擦文文化は抉入離頭銛を土師器にともなうそれより一段階前にすでに持っていたと思われることである。それは抉入離頭銛がいつ、どこで発生したかという銛自体の起源問題とともに、擦文文化が東北地方北半にまで浸透していたことを土器以外に証明する有力なひとつの材料として提示されるからである」と述べている。

註55) 上田雄1992年6月『渤海国の謎』　講談社新書　P107

註56) 同上　P104～P105